

第三章 熊野町の伝承歌謡

第一節 歌詞の部

熊野町における民謡の調査は、いまだ十分ではないが、知り得た範囲のものを大まかに次の五つに大別して、その歌詞を記しておくことにする。

一、労作歌

二、酒盛歌・祝い歌

三、わらべ歌

四、踊り歌（付 ニワカの口上）

五、口説音頭

一から三までの資料は、安芸郡熊野中学校編『熊野誌余滴（一）』（昭和三十七年）、中国放送編『広島県の民謡』（昭和四十六年）と、福岡孝義氏採集のもの、及び広島女子大学昔話研究会が昭和五十九年夏に集録したものに基づく。それらを合わせて分類し、適宜配列したが、一部表記を手直しし、読みやすくするよう心がけた。各資料で同一歌が重出している、歌詞に多少の異同がある場合は、※印を付け活字の大きさを落として注記しておく。なお、三のわらべ唄は、本文（第二章第四節中の「人の一生」）に記したものは省き、『熊野誌余滴』に出ているもの

だけにとどめる。四では、榊山神社社務所発行のパンフレットに基づき、神楽歌の歌詞を校訂したうえで、福岡孝義氏採録の「ニワカの口上」を添えることにした。五では、平谷区の盆踊り口説二篇を翻刻するが、四と五の翻刻要領などは、それぞれのはじめに解説として示しておく。

一 労作歌

親の方から巻（「巻がきた」とも）もろた

親の方から来た巻や何か

御霊会酒どま来そなもの

代掻歌

※親の方から巻ともなんじや

菖蒲酒ども来そなもの

親の方から来た巻（「巻」）見れば

中（「中」）にや実のない葎（「葎」）ばかり

一夜泊りのお客に惚れな

つ（「つ」）いちゃ行かれぬ泣き別れ

都（「都」）じゃと（「つ」）言（「つ」）てわしを連れ出して

どこが都か山奥か

娘行かぬかやおいらの背戸にや

忍び桜の枝折りに

閉めて寝なされまだ夜は深い

明けりやお寺の鐘が鳴る

苗をよう取るきのぼり苗を

人が千取りや二千取る

苗取り上手の苗取る見やれ

水もゆるがぬ苗取る見やれ

恋し小川の鶺鴒の鳥見やれ

鮎（「鮎」）をくわえて瀬をのぼる

恋の提灯雨夜の蛍

田植歌

五月御霊会がまた来たそいな

思い切れたりとぼしたり

しょうがえのぼばさん焼き餅好きじゃ

ゆうべ九つ今朝七つ

ゆうべ九つ多いことないか

今朝の七つが食べすぎた

これのお背戸にや茗荷と露が

冥伽うれしや富貴繁昌

これのお背戸にや筍二本

子供に言うな爪たてな

これのお背戸にや二又榎

榎ならず金になる

初 摺 歌

茶屋の行灯あんどんに梅屋と書いて

客は驚来てとまれ

蝶よ花よと育てた娘

酒に代えます水酒に

木なら竹なら割れてもみしよが

中にくるみがあるわいな

第三章 熊野町の伝承歌謡

京のはやり市松ごぼん

鹿の子前だす丈はせ襦袢

麦 打 歌

うたいなされやおうたいなされ

歌で御器量がさがりやせぬ

うたい声すりや殿御さんと思うて

いらぬ水まで汲みに出た

しんく小豆島の米屋の娘

米のなる木をまだ知らぬ

米のなる木を見たくば見やれ

六畳たたみの裏見やれ

麦こなし歌

話とりおけ歌ならうたえ

話や仕事のじやまになる

あなたみたよな牡丹の花が

咲いております来る道(この道に)とも

I 生活誌編

私とあなたは道端小梅

ならぬさきから人が知る

あなた百までわしや九十九まで

ともに白髪しろがの生えるまで

来いで来いで待つ夜にや来いで

待たぬ夜にや来て門かどに立つ

私が思うても相手の殿御

思っているやらいらぬ(マ)やら

娘十五になりや背戸の垣いらぬ

村の若い衆が垣となる

筆を柱に硯を舟に

書いたる文を帆に巻いて

思いを積んで深川へ

恋の港に着いたなら

早く錨をおろしたい

海田鳥が矢野町おりて

銭もないのに買おう買おう

熊野三千石矢野千五百

あいの平谷九斗一合

熊野呉地にや五月から踊る

半けおりたい夏の節

水はさかさま熊野の水は

跡に流れて瀬野に出る

農作業歌

奥山に一人米つくあの水車

誰を待つやらくるくると ショングエー

馬がもの言ゆた隣(何々)の馬と屋号を入れる。悪口になるので隣とうたつた)が

今日も食わずに出ることか

殿御さんよい筆巻きなされ

いやな毛もみはわしがする

親の意見となすびの花は

千に一つのあだはなし

木挽歌

木挽やこんや根ひく根さえつめば

どこの小屋でも金^{かね}たままる

筆づくり歌

熊野よいとこ一度^(そよ風吹いて「とも」)はおいで

恋の文書く筆どころ

熊野筆屋の筆司の歌は

山の木の芽も聞きやなびく

筆は七十三度も変わる

咲いたあじさいただ一度

心よう持て心が大事

とかく心が身を責める

あそこの熊野の筆屋の娘

米のなる木をまだ知らぬシヨンガエー

米のなる木を見たくば見やれ

六畳たたみの裏見やれ

毛揉みや楽でも恰好づぎやできぬ

筆司みたよに楽じゃない(以上、毛揉み唄)

仕事しましよ筆作りましようよ

広い熊野は筆どころ

熊野筆屋の筆司の娘

朝も早うからたすきがけ

嫁をとるなら熊野の娘

朝は早うから筆作る

嫁にやいくまい熊野の嫁にや

行くとねぶらす筆の毛よ

姉と妹に紺を着せりや

どちが姉やら妹やら

姉と妹は手を見りやわかる

妹^{ねんせ}年生で姉^{すいひつ}や水筆

人に隠して書く消息^{たより}さえ

筆の命毛にや隠されぬ

筆がものいう千里が先で

書いた文さえ早うとどけ

※筆がものいう千里が先でよ
泣くも笑うも筆次第よ

書いた文にはまこと^(「にも」)があろうか

筆にや狸の毛がまじる

忘れなざるな堀之堀城山の

下は熊野の筆どころ

月も明星もみな西したう

さぞや東はさびしかろ

インヤール寒さむや北風今日南風

明日は浮名うきなのたつみ風よ

インヤール殿御さんよい必ずよそでよ

浮名うきななさればこれがいとまよ

インヤール五月御霊会ごりよひがまた来た来たそうな

親かたの方から巻まがきた(以上、筆まき唄)

馬子歌

西は追分東は関所

連れてお帰り茶屋までも

わたしやあなたのお寝間の下で

泣いて明かした夜がござる

一夜泊りのお客にや惚れな

ついて行かれぬ泣き別れ

地搦歌

(この歌は、祝いの宴席で歌われることが多いため、「祝い歌」の別名をもつ。)

ハアー水はさかさま ハシヤントシヤント 熊野の水

は

跡に流れてコリヤ瀬野に出る ショコホイショコホ

ーリキヤデ ホーオオホイホイ

ハアー瀬野に流れて ハシヤントシヤント 海田に落

ちて

海田女郎衆のコリヤ化粧の水よ ショコホイショコ

ホーリキヤデ ホーオオホイホイ

アリヤ土方さんには アリヤドンドン どこよて惚れ

た

アリヤつるの横ふりコリヤ見て惚れた アリヤシャ

ーカホイシャーカーホーリキヤデ ホイホイホイホ

イ

アリアうたい声すりや アリヤドンドンアリヤ 殿御

さんか思うて

アリヤいらぬ水までコリヤ汲みに出たよ　アリヤシ
ヤカホイシャーカホーリキヤデ　ホイホイホイホイ
ハアどれもどなたもおうたいなされ

歌じや御器量がさがりやせぬ　シヤカホイシヤカホ
ーリキヤシヤ　ホイホイホイホイ

二　酒盛歌・祝い歌

伊勢音頭

姉さん嫁入りはいつ頃か

正月過ぎて春過ぎて

菜種の花の咲く頃よ

たんす七竿ひつ八竿

内証金が三百両

これ程仕立ててやるからは

家へ向いて帰るなよ

それは母さんそりや無理よ

西が曇れば雨とやら

東曇れば風とやら

北が曇れば雪とやら

たとえ南があくとても

沖で暴風あるときは

もとの港へ帰りくる

去年生れたうぐいすが

今年はじめて伊勢参り

お伊勢へ参っても宿がない

梅の木小枝に宿とつて

梅を枕に法華経誦む

お杉やお玉のひくしやみは

一文やらんせ放らんせ

親の御恩は忘れても

あなたの御恩は忘りやせぬ

ほう　ほう　蜚こい

あっちの水は苦いぞ